

芦屋美術会 福のり子特別講演 レポート



この日、芦屋美術会の特別講演会として、京都造形芸術大学アートプロデュース学科の学科長である福のり子氏が登壇し、講演を行った。当日、会場には美術会の会員にとどまらず34名が集まった。芦屋美術会では、生徒が自主的にテーマを決め、グループで研究活動や発表を行っている。また、そのテーマに合わせたレクチャーを、顧問の佐藤宏道先生（大阪大学医学系研究科 教授）が行なっている。脳の視覚情報処理と芸術の関係についても考察したりと、科学と芸術の垣根を越えるような実践も多く見られる。今回お招きした福先生は、芸術鑑賞教育に取り組まれているが、「芸術も科学も、ヒトとそのヒトが生きる世界の不思議 つまり“？”に取り組もうとしている点では同じ」という提言から幕を開けた。

講演序盤、福先生は、「アートは社会で役に立つか」というテーマをもとに、現在の小～高等学校における美術教育の変遷と現状について紹介した。そして、「作り手」中心の教育ではなく「受け手」を育てる環境の重要性について述べた。

福先生は、アートは作品と鑑賞者の間に立ち上がる深淵で不思議なコミュニケーションであるとし、このコミュニケーションを複数の鑑賞者で行う「ACOP (Art Communication Project)」という活動を京都造形芸術大学で実践している。ACOPでは、「みる」「考える」「話す」「聴く」という、人間がすでに持っている能力を日常よりも意識して駆使し、作品を鑑賞していく。

この「意識して」というのは、みることや聴くことは、常にみえていない／聴いていないことを孕んでいることを踏まえつつ鑑賞するということの意味し、メタ認知的な能力を要することである。アート作品の鑑賞は、そこにはないものを創造的解釈を通して読み取る行為であり、これが作品と鑑賞者の対話となる。さらに、ACOP では鑑賞者は複数であり、他の鑑賞者の発言においても、言葉尻だけを捉えるのではなく、その奥にある真意を読み取ることが要求される。福先生は、これこそが社会でアートというコミュニケーションが役に立つ所以だと結論付けていた。

公演後、聴衆も交えた質疑応答の時間が設けられた。そこでは「作品や作家にまつわる知識を持っていることは ACOP では好ましくないことなのか」という問いが挙がった。これに対し、福先生は「知識を持っていることは悪いことではないが、そのことにより”私はすでにこの作品を理解している”という認識となり、より深く鑑賞するのを妨げてしまうこともある」と返答した。作家や作品に関するあらゆる情報は、作品そのものの中にあるものではなく、あくまで作品を取り巻く周縁に位置している。つまり作品から投げかけられるあらゆる問いについて鑑賞することとはまた別のものであるということだ。

また「ACOP のような方略は実際の教育現場でも応用されているのか」という質問も挙がった。これに対しては、平成20年度より教育委員会の指導要項に鑑賞教育が盛り込まれるようになったこと、そして数年後に大きく改定が行われる大学入試においても、順天堂大学医学部の入試問題に ACOP と酷似した内容の問題が出題されていることなどから、近年日本でも取り入れられているということが紹介された。

質疑応答の後、芦屋美術会の会員で先生を囲んだ茶話会が行われ、活発な議論が展開されていた。芦屋美術会では、5月の定例会ですでにこの講演会の導入として、ACOP 方式の作品鑑賞ワークショップを行っている。今回は、その際の発言や鑑賞の流れを振り返り、改めて作品鑑賞についてフィードバックする機会となっていた。講演会前の鑑賞では、鑑賞者は作品には1つの正解や「作家の意図」があるのではないかと考えてしまい、発言をためらったり、多方面から作品を鑑賞できない状況に陥っていた。しかし「作品の解釈はみる人の数だけあるため、1つの決まった正解などはない」、「それまで正解だと思っていた美術史ですら日々書き換えられているので、必ずしも確固とした真実として捉えるべきではない」ということを踏まえ、改めて ACOP 鑑賞会を行いたいという方向へまとまっていった。また、造形大で行なわれている ACOP でのエピソードや、福先生のキュレーター時代の体験談など、より深く掘り下げた内容で盛り上がりを見せ、茶話会も実りある時間となった。

文責：原 泉

(大阪大学大学院 生命機能研究科 博士課程)